

令和元年6月12日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03470

研究課題名(和文)カトリック系人文主義教育と日本 イエズス会を中心に

研究課題名(英文)Catholic-Humanistic Education and Japan

研究代表者

桑原 直巳 (KUWABARA, Naoki)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：20178156

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,000,000円

研究成果の概要(和文)：イエズス会の修道会としての特質は国家の枠を超える国際的視点にある。また、その人文主義的な教育、就中修辞学教育の伝統は、直面する社会的現実に対して柔軟に対応する体質をもたらしている。本研究の結果、こうしたイエズス会の特徴が多様な文化と対話する基本姿勢をもたらしていることが明らかになった。第二バチカン公会議以降の今日、イエズス会を中心とするカトリック系人文主義教育は、社会正義の強調という方向を打ち出している。この方向は、グローバル化が進展しつつあり、移民の増加、地球レベルでの経済格差の拡大といった問題に直面している現代社会に対して様々な示唆を与えることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

特に、グローバル化が進展しつつあり、移民の増加、地球レベルでの経済格差の拡大といった問題に直面している現代社会に対して、人文社会系の学問および人文主義的教育の意義が問われている。そうした中、イエズス会およびこれを中心とするカトリック系人文主義教育の伝統が示している国際的視野、および社会的現実に対する柔軟な対応をもたらしていることが明らかになった。そしてこうしたイエズス会およびこれを中心とするカトリック系人文主義教育が、現代示している社会正義の強調という方向性をもつ社会的意義が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：As the religious order, the Society of Jesus is characterized with its international perspective. And its tradition of the humanistic education, especially that of the rhetoric education, concluded in the flexible attitude to the social actuality. Our investigation have made clear that these characteristics of the Society of Jesus brings its basic attitude for the a dialog with various culture. The Catholic humanistic education, especially that of the Society of Jesus, after the Second Vatican Council shows the emphasis of social justice. It became clear that this direction can give various suggestions to the modern society in which globalization is progressing and is faced with problems, such as the increase in immigration and expansion of the economic discrepancy in the global level.

研究分野：西洋中世哲学・中世倫理思想史

キーワード：キリシタン イエズス会 イエズス会学校 人文主義教育 哲学・倫理教育 カトリック教育 修道会
霊操

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者桑原は元々トマス・アクィナスの倫理思想の研究を専門とし、哲学・倫理学の分野で科学研究費の交付を受けてきたが、哲学・倫理学関係の学会で初等中等教育における倫理教育の重要性を訴え続けてきたこと、また日本カトリック教育学会会長に就任して現在日本のカトリック学校が直面する諸問題に関与するなどの事情により、「教育」の分野へと関心をシフトさせてきていた。こうした立場にもとづく問題関心は個人研究の範囲を超えた連携を必要とするため、基盤研究(B)として教育学の分野で申請し採択された。

哲学・倫理教育に関与する立場から痛感されるのは、現在、日本では教養教育および人文系の諸学問の社会における存在意義が厳しく問われてきている事実である。しかし、日本では人文学および人文的教養のもつ意義と歴史とについては意外と知られていない。「人文主義」といえばいわゆるルネサンス期が連想されるが、西欧世界における「教養」および「人文学」の伝統は、古代末期から中世を貫く自由学芸の伝統が支えてきている事実にはあまり注意が払われていない。またこれも従来日本ではあまり知られていない事実であるが、西欧の教育史における初等・中等学校の歴史は大学よりも新しく近代に成立し、その際自由学芸を体系的に教育分野に適用したイエズス会をはじめとする近代に成立したカトリックの修道会が決定的な役割を果たしている。ここに、イエズス会を中心とするカトリック教育修道会の軌跡を改めて明らかにすることによって、現代日本社会における人文主義的教育理念の存在意義について、これまで知られることのなかった側面に光を当てる可能性があるのではないかと着想した次第である。

2. 研究の目的

本研究では、以上の問題意識にもとづき、(1)西洋教育思想史の文脈の中におけるイエズス会を中心とするカトリック系人文主義教育の展開およびその歴史的意義を明らかにし、(2)日本社会という特殊な環境のもとで、イエズス会を中心とするカトリック系人文主義教育が辿った展開を跡づけ、(3) (1)(2)の成果から現代日本社会に対する示唆を明らかにすることを旨とする。

3. 研究の方法

本研究の研究方法としては、目的とする上記(1)～(3)それぞれの領域について、(a)研究代表者、および各研究分担者による文献的研究、(b)研究代表者、各研究分担者、海外および国内の研究協力者を招聘しての講演会、国際シンポジウム、ワークショップの開催、(c)国内および国外のイエズス会学校およびカトリック学校の訪問調査を行った。

4. 研究成果

以下に、上述研究方法の3つの柱である(a)～(c)に即して研究成果をまとめることとする。

(a)に関して平成27年度には、研究代表者は日本カトリック神学会、キリシタン文化研究会、本科研とカトリック教育学会共催シンポジウムで発表および講演を行い、成果を論文として公刊した。特に、日本倫理学会では倫理学教育をテーマとする形で日本倫理学会の共通課題(27年度)を企画し、人文主義的教育の現代的な意義について検討する機会も持った。また、パリでの学会(ENOJP)、西日本哲学会、東方キリスト教学会、聖心女子大学宗教科教育研究会で発表および講演を行い、成果を論文として公刊した。特に、28年度には本課題に関するこれまでの研究成果をまとめた単著書『キリシタン時代の日本とイエズス会教育』を公刊した。また各研究分担者もそれぞれの所属学会で研究成果を積極的に発信し、その成果は本課題に関連する単著書として結実している。

(b)に関しては、平成27・28年度には筑波大学と連携して「つくばグローバルサイエンスウィーク」にて研究セッションを開催した。さらにはキリシタン文化講演会、カトリック教育学会その他研究会に16世紀のイエズス会の人文主義的教育に関する世界的な研究者であるアントニ・ウセルル(サンフランシスコ大学)を招いて講演を実施した。また、平成28年度から30年度にかけて、8回にわたりカトリック教育学会との共催で連続シンポジウムを開催した。

(c)に関しては、桑原・夏秋が平成27年9月および29年3月の二回にわたり、東ティモールの聖イグナチオ学院、聖ジョアン・デ・プリトー教育大学を訪問・調査した。他にも桑原はコンゴ民主共和国の聖カニシウス哲学院および高等学校、国内では広島学院を訪問し、特に広島学院では哲学対話の実践を試みた。また、桑原は平成28年度に米国サンフランシスコ大学のリッチ研究所を訪問した。この訪問はイエズス会大学としてのサンフランシスコ大学における教育・研究の視察と(a)に関連しての16・17世紀における東アジアにおけるイエズス会の教育を中心とする活動の研究拠点としてのリッチ研究所の見学とを兼ねたものである。

また、高祖は自身が日本国内のイエズス会学校法人理事長として学校運営を主導しつつ、西インド諸島のジャマイカとトリニダード・トバゴを訪問し、ジャマイカ・キングストンでイエズス会が運営するSt. George Collegeを訪問。またTTのポートオブスペインの大司教館を訪れ、ラノス補佐司教と現地のカトリック教育関係者4人と懇談するなどした。さらに川村は3月にヴァリニャーノゆかりのパドヴァ・キエティ・ローマを訪問するなど、研究分担者はそれぞれの立場からイエズス会学校を中心にカトリック学校の実態についての認識を深めた。

以上の研究成果をとりまとめ、第一部「草創期のイエズス会と教育」、第二部「16・17世紀の日本とイエズス会教育」、第三部「近代におけるカトリック教育」、第四部「現代におけるイエズス会教育」との構成のもとに、知泉書館から出版する計画の具体化を図っている。

研究から得られた成果は多岐にわたるが、研究代表者、研究分担者、研究協力者による本研究の成果の全貌は上記書籍において明らかにする予定である。ここではとりあえず、本研究の結果、研究代表者が得ることができた知見の概略を書籍の構成に従う形で紹介しておく。

「草創期のイエズス会と教育」に関する研究は研究代表者自身が主として参画している。ここではまず「霊操」すなわちイエズス会の霊性を修道霊性史の中に位置づけると同時に、教育事業に乗り出したイエズス会の活動を教育史の中に位置づけることを目指した。

修道霊性史において、12世紀に成立した托鉢修道会（ドミニコ会、フランシスコ会）は中世初期ヨーロッパの農業経済に適応したベネディクト型修道パラダイムから、都市生活を基盤とする社会進出型の修道パラダイムへの転換を果たした。イエズス会はこの社会進出型の修道パラダイムへの傾向をさらに徹底させた存在であった。社会進出型の修道パラダイムは個人の自律的霊性の成立を要求するが、このことはイエズス会霊性の根本をなす「霊操」の中に流れる修道制初期の隠修士に通ずる志向に支えられていたことが明らかになった。

他方、イエズス会はその知的養成に際してはパリ大学を中心とするルネサンス的人文主義の伝統により徹底的な影響を受けていた。本研究では、特にイエズス会的人文主義的教育の中でも修辞学教育の重要性に光を当てることとなった。修辞学は「蓋然性」の重視と、直面する社会に対する現実的な対応をもたらす点にその特徴がある。現実社会に対する柔軟な対応はイエズス会の重要な特徴の一つであるが、修辞学教育はその基盤を提供していた。

「16・17世紀の日本とイエズス会教育」に関する研究としては、いわゆるキリシタン時代の日本におけるイエズス会の教育事業の意義を検討することを目指す。

上述の現実社会に対する柔軟な対応というイエズス会の特色は、日本および中国におけるいわゆる「適応主義」という姿勢を帰結している。本研究では、日本における「適応主義」の諸相について、特にイエズス会の東洋における宣教活動を指導した東インド巡察師A・ヴァリニャーノの事跡を中心に明らかにした。日本におけるヴァリニャーノの適応主義は、具体的には日本に教育施設（コレジヨ、セミナリヨ）を設けること、日本人をイエズス会員として迎え入れ、司祭とすることなどに示されている。研究代表者自身、まずキリシタン時代の日本におけるイエズス会教育施設での教育について全体的サーヴェイを行い、前述単著書にとりまとめた。

日本におけるイエズス会の高等教育を担ったコレジヨでの教育活動において特に注目されるのは「靈魂の不滅」を重視したことである。「靈魂」に関する哲学的な考察は、日本文化との対話をもたらした課題であった。本研究では特にコレジヨの教授であったペドロ・ゴメスを中心に彼がコレジヨで行った靈魂についての哲学的立場を検討した。その際、ゴメスの理論を、ヨーロッパにおける靈魂論の研究史、当時のスコラ学の動向の中に位置づけるとともに、たとえば実質的に修行・道徳不要論に墮していた天台本覚思想に代表されるような当時の日本思想に見られた文化的土壌との関連をも明らかにした。

「近代におけるカトリック教育」に関する研究としては、近代におけるイエズス会を中心とするカトリック的教育事業の展開を検討することを目指す。

イエズス会は、その歴史を通じて、近代社会を特徴づける中央集権的な国家による支配に対して一貫して緊張関係にある存在であった。それは中世的な社会への志向とも言えるが、今日的な文脈に照らせば国家を超えた「国際的視野」を特徴する、ということができる。

日本に限定した場合、禁教の江戸期を経た後の明治期におけるキリスト教およびキリスト教教育の導入はプロテスタントが先行していたため、カトリックの思想家や教育はプロテスタントのその影に隠れがちであった。本研究では黒住を中心として、岩下壯一、吉満義彦、戦後のホイヴェルス、愛宮ラサルらの活動に光を当てた。上に指摘したとおり、イエズス会を中心とするカトリシズムは、全般的に国家を超えた原理のもとに動く国際性を特徴としているが、そうした視点は岩下や吉満においても明らかである。「国際性」という特徴は特にイエズス会において顕著であるが、同時にイエズス会は直面する文化に対する柔軟な対応をも示している。

「現代におけるイエズス会教育」に関する研究としては、特に第二バチカン公会議をめぐるイエズス会およびイエズス会教育の動向の意義を検討することを目指す。

現代におけるイエズス会教育について検討するには、カトリック教会全体の方向に決定的な転換をもたらした第二バチカン公会議についての考察を外すことはできない。本研究では、第二バチカン公会議前後のイエズス会およびイエズス会教育の展開を、特にイエズス会総会での動向を中心に明らかにした。注目に値するのは、イエズス会が社会正義の重視とすることを強調するようになったことである。その結果、イエズス会が力を入れつつある、いわゆる「第三世界」や貧しい人々へ目を向けての新たな動向について光を当てることができた。この点について、研究代表者自身コンゴ、東ティモールなどの訪問を通じて実地に見聞もした。さらに、先進国内における貧しい人々へのアプローチとしては、アメリカ合衆国を中心にイエズス会によって創始された「クリスト・レイ・スクール」(移民をはじめとする貧しい人々に働きながら高等教育を受ける道を切り開く営み)の存在が注目に値する。

以上から、イエズス会はその修道会としての特質から国家を超える視点に立って動いていること、その人文主義的教育、就中修辞学教育の伝統が現実に対して柔軟に対応する体質をもたらしていることが明らかになった。このことが多様な文化と対話する基本姿勢をもたらしていると言える。第二バチカン公会議以降の今日にあって、イエズス会を中心とするカトリック的人文主義教育は特に社会正義の強調という方向を打ち出している。この方向は、グローバル化が進展しつつあり、移民の増加、地球レベルでの経済格差の拡大といった問題に直面してい

る現代社会に対して様々な示唆を与える上での視座を示していることが明らかになった。

以上の研究成果は、現代日本社会に対して人文系の諸学問が与える示唆に対する一つのモデルを示す根拠となることが期待できる。これらの知見に基づいて、今後研究代表者、各研究分担者は、哲学教育・倫理教育・道徳教育などのかかわる諸学会等の場において積極的な提言を行なうことが課題であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 56 件)

桑原直巳、イエズス会人文主義教育と女子修道会 - 聖心会を中心に -、筑波大学倫理学研究会編『倫理学』、35 巻、1-21 頁、2019 年

高祖敏明、創立期のイエズス会学校を訪ねて 学校教育という使徒的活動へのイグナチオの想い、上智学院イエズス会教育推進センター編『叡智を生きる 他者のために 他者とともに』第 1 巻、5 - 18 頁、2019 年

川本隆史、正義と愛を“学びほぐす” 担当科目「キリスト教倫理」の工夫と目論見、原敬子・角田佑一編『「若者」と歩む教会の希望』、120-137 頁、2019 年

桑原直巳、適応主義の源泉としてのイエズス会修辞学教育、筑波大学倫理学研究会編『倫理学』第 34 号、1-21 頁、2018 年

桑原直巳、第二バチカン公会議とイエズス会 社会正義の問題を中心に、筑波大学哲学・思想専攻『哲学・思想論集』、第 43 号、1-21 頁、2018 年

高祖敏明、シドッチ神父の歴史的役割を再考する、文京区教育委員会編集・発行『シンポジウム シドッチ神父と江戸のキリシタン文化』、第 1 巻、7~25 頁、2018 年

高祖敏明、ミッション・ショーカシヴィル・アンバサダーか 天正遣欧使節の歴史的位置を考える、『上智大学教育学論集』第 52 号、17~34 頁、2018 年

根占献一、ヒューマニストたちの挑戦と運命 イタリア・イベリア両半島における、『歴史評論』、第 9 号、52 - 62 頁、2018 年

根占献一、天正遣欧使節が出会った人、出会わなかった人?細川ガラシャと同時代を生きたイタリア女性たちを中心に、『学習院女子大学紀要』、第 20 号、79-93 頁、2018 年

黒住眞、東アジア十八~十九世紀における日本の「霊性」、島根県立大学編『北東アジア研究』、別冊第 4 号、203-216 頁、2018 年

桑原直巳、東ティモールにおけるイエズス会教育 聖イグナチオ・デ・ロヨラ学院と聖ジョアン・デ・プリトー学院、『日本カトリック神学院紀要』、第 8 号、153 - 182 頁、2017 年

高祖敏明、わが国における大学改革とカトリック大学の役割、仙台白百合女子カトリック研究所『論集』、21 巻、1-25 頁、2017 年

黒住眞、日本の「霊性」1930~60 年代 近代日本と霊性の現われ、『思想史研究』、第 23 号、130-152 頁、2017 年

川本隆史、ロウルズ・キルケゴール・マタイ伝 《purity of heart》の系譜を探る、『風のたより』(風行社) 65 巻、1-4 頁、2017 年

桑原直巳、「考える倫理」と「考える道徳」、日本倫理道徳教育学会編『日本倫理道徳教育学会紀要』、創刊特別号、4-13 頁、2016 年

桑原直巳、霊操と隠修士、日本カトリック神学会編『カトリック神学会誌』27 巻、173-192 頁、2016 年

桑原直巳、ペドロ・ゴメスによる『靈魂論』の位置 - anima 論の展開とキリシタン時代における日本布教の文脈の中で -、筑波大学倫理学研究会編『倫理学』、32 巻、1-21 頁、2016 年

高祖敏明、Academic Integrity と『上智大学の教育理念』 現状とこれからの取り組み、大学評価・学位授与機構編『知の質とは アカデミック・インテグリティの視点から』(平成 27 年度大学質保証フォーラム報告書) 1 巻、54-56,63,64 頁、2016 年

根占献一、Aristotelianism, Platonism and Humanism in Japan's Christian Century, Bulletin of Gakushuin Women's College、18 巻、149 - 158 頁、2016 年

黒住眞、文化史から見た「天地」「幸福」「愛」 日本における在り方と近現代、『ODYSSEUS』20 巻、1-31 頁、2016 年

①夏秋英房、東ティモールにおける学校教育とカトリック教会、國學院大學人間開発学研究 7 巻、135-156 頁、2016 年

②川村信三、撰河地域のキリシタンと戦国宗教史、仁木宏、中井均、中西裕樹、撰河泉地域文化研究所編『飯盛山城と三好長慶』(戎光祥出版) 1 巻、226-253 頁、2015 年

他 34 件

〔学会発表〕(計 69 件)

桑原直巳、「道徳」を内包する「宗教」、聖心女子大学宗教科教育研究会講演、於 聖心女子大学グリーンパーラー(東京都渋谷区) 2018 年 12 月 28 日

桑原直巳、適応主義の源泉としてのイエズス会修辞学教育、本科研・日本カトリック教育学会共催 第五回シンポジウム、於 ニコラ・パレ(東京都千代田区六番町) 2018 年 3 月 11 日

川本隆史、指定討論: Spirituality, Intimacy, Vulnerability をめぐって、日本「祈りと救いところ」学会、第 4 回大会シンポジウム 宗教の共生、2017 年 11 月 18 日

桑原直巳、The Jesuits and Japanese Buddhism in the Sixteenth and Seventeenth Centuries、3rd Annual Conference of the European Network of Japanese Philosophy、パリ（フランス共和国）、2017年11月3日

島村絵里子、Ignatian Spirituality and Zen Buddhism - An Example of Inculturation and Interreligious dialogues in Japan -、The 3rd European Network of Japanese Philosophy Conference、パリ（フランス共和国）、2017年11月3日

根占献一、The Renaissance in Japan's Christian Century: The Problem of Translation.、Renaissance Society of America、於 シカゴ（アメリカ合衆国）2017年3月31日

川本隆史、交わり（コミュニティ）・人格・信仰 初期ローマの宗教思想に寄せて、オリエンズ・セミナー、於 オリエンズ宗教研究所（東京都世田谷区松原）2017年3月30日

高祖敏明、Historical Background of the Introduction of Western Music into Japan - Focusing on the Great Era of Navigation and the "Kirishitan Century" -、The 20th Congress of the International Musicological Society, Tokyo, Room 5-406 of the Tokyo university of the Arts（東京芸術大学・東京都台東区）2017年3月21日

桑原直巳、『イエズス会学事規程』と「パリ方式 Modus Parisiensis」 キリスト教教育と人文主義的「エリート」、本科研・日本カトリック教育学会共催 第一回シンポジウム、於 ニコラ・バレ（東京都千代田区六番町）2017年3月11日

川村信三、Controversial Idea of "Immortality of the Spirit (Anima) in the Jesuit Compendium (Japanese text) written in 1595. 国立中山大学（孫文大学）於 広州（中華人民共和国）2016年11月5日

アントニ・ウセル、ペドロ・ゴメスの『講義要綱』とコレジヨの信仰教育、カトリック教育学会第40回全国大会 基調講演、於 長崎純心大学（長崎県）2016年9月3日

高祖敏明、わが国における大学改革とカトリック大学の役割、仙台白百合短期大学・仙台白百合女子大学50周年記念講演、於 仙台白百合女子大学大教室（宮城県仙台市泉区本町）2016年7月2日

高祖敏明、ミッション・ショーカシヴィル・アンバサダーが 天正遣欧少年使節の歴史的位置を考える、在日イタリア大使館・イタリア文化会館・イタリア国立東方学研究所主催「シンポジウム イタリアと日本、初めての出会い ドメニコ・ティントレット作『伊東マンショの肖像』の発見について」、於 イタリア文化会館（東京都千代田区九段南）2016年5月18日

桑原直巳、アリストテレス・トマス・ゴメス - anima 論の系譜 -、哲学会第54回研究発表会、於 東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）2015年10月31日

川村信三、Alessandro Valignano, a Visitor of East Asia Mission of Jesuit in the Sixteenth Century.、ライプニッツ没後 300 年記念シンポジウム（G.W. Leibniz und die europaishe Begegnung mit China）、於 ハノーヴァーライプニッツ大学（ドイツ連邦共和国）2015年10月30日

根占献一、The Japan's Christian Century and the Italian Renaissance、Tsukuba Global Science Week 2015、於 つくば国際会議場（茨城県つくば市）2015年9月29日

川村信三、Tracing Christianity in Early Modern Japan: The Marega Collection in the Vatican Library and its Value for International Co-operation、バチカン図書館シンポジウム（主催 バチカン図書館・国文学研究資料館 共催大分県教育委員会・東京大学史料編纂所）於 ローマ（イタリア共和国）2015年9月12日

高祖敏明、Academic Integrity と『上智大学の教育理念』 現状とこれからの取り組み、大学評価・学位授与機構主催平成27年度大学質保証フォーラム「知の質とは アカデミック・インテグリティの視点から」パネルディスカッション、於 一橋講堂（東京都千代田区）2015年7月27日

黒住眞、日本文化史から見た「天地」「幸福」「愛」、シンポジウム『コスモス・幸福・愛』（地域文化研究専攻第23回）於 東京大学駒場キャンパス18号館（東京都目黒区）2015年6月27日

黒住眞、日本の思想史から見た近代また戦後の「宗教と社会」とくに戦後発生した課題と今後の方向、「宗教と社会」学会第23回大会テーマセッション「戦後70年の宗教と社会」、於 東京大学本郷キャンパス法文2号館（東京都文京区）2015年6月14日

他49件

〔図書〕（計13件）

黒住眞、文化形成史と日本、総ページ数336、東京大学出版会、2019年

東琢磨・川本隆史・仙波希望編、忘却の記憶 広島、総ページ数432、月曜社、2018年

桑原直巳、キリシタン時代とイエズス会教育 アレッサンドロ・ヴァリニャーノの旅路、総ページ数196、知泉書館、2017年

根占献一、イタリアルネサンスとアジア日本、総ページ数290、知泉書館、2017年

川村信三、キリシタン大名高山右近とその時代、総ページ数253、教文館、2016年

高祖敏明/サリ・アガスティン共編、アジアにおけるイエズス会大学の役割、総ページ数253、上智大学出版、2015年

他7件

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：高祖 敏明

ローマ字氏名：KOUSO, toshiaki

所属研究機関名：上智大学

部局名：総合人間科学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：80103919

研究分担者氏名：根占 献一

ローマ字氏名：NEJIME, kenichi

所属研究機関名：学習院女子大学

部局名：国際文化交流学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：50208287

研究分担者氏名：黒住 眞

ローマ字氏名：KUROZUMI, makoto

所属研究機関名：東京大学

部局名：大学院総合文化研究科

職名：名誉教授

研究者番号(8桁)：00153411

研究分担者氏名：川本 隆史

ローマ字氏名：KAWAMOTO, takashi

所属研究機関名：国際基督教大学

部局名：教養学部

職名：特任教授

研究者番号(8桁)：40137758

研究分担者氏名：川村 信三

ローマ字氏名：KAWAMURA, shinzo

所属研究機関名：上智大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：00317497

研究分担者氏名：夏秋 英房

ローマ字氏名：NATSUAKI, hidehusa

所属研究機関名：國學院大學

部局名：人間開発学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：30237573

(2)研究協力者

研究協力者氏名：アントニ・ウセレル

ローマ字氏名：UCERLER, Antoni

研究協力者氏名：島村 絵里子

ローマ字氏名：SHIMAMURA, eriko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。